

2020. 5. 31 (日) ヤコブの手紙 4:1 ~ 10

4:1 あなたがたの間の戦いや争いは、どこから出て来るのでしょうか。ここから、すなわち、あなたがたのからだの中で戦う欲望から出て来るものではありませんか。

4:2 あなたがたは、欲しても自分のものにならないと、人殺しをします。熱望しても手に入れることができないと、争ったり戦ったりします。自分のものにならないのは、あなたがたが求めないからです。

4:3 求めても得られないのは、自分の快樂のために使おうと、悪い動機で求めるからです。

4:4 節操のない者たち。世を愛することは神に敵対することだと分からないのですか。世の友になりたいと思う者はだれでも、自分を神の敵としているのです。

4:5 それとも、聖書は意味もなく語っていると思いますか。「神は、私たちのうちに住ませた御霊を、ねたむほどに慕っておられる。

4:6 神は、さらに豊かな恵みを与えてくださる」と。それで、こう言われています。「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える。」

4:7 ですから、神に従い、悪魔に対抗しなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。

4:8 神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪人たち、手をきよめなさい。二心の者たち、心を清めなさい。

4:9 嘆きなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。

4:10 主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高く上げてくださいます。

<説教>

本日は聖霊降臨節（ペンテコステ）です。

ペンテコステとはギリシア語の 50 を表す語に由来する言葉で、「五旬節」（使徒 2:1, 20:16、I コリント 16:8）と訳されています。

神がご自分の民イスラエルに出エジプトを記念して行うようにお命じになった「過越の祭」から 7 週を数えた 50 日目に行うようにお命じになった「七週（しちしゅう）の祭」の日がすなわち「五旬節の日」でした。

今からおよそ 2000 年前のその「五旬節の日」にエルサレムで一つ所に集まっていたイエス・キリストの弟子たちに聖霊が特別な形で激しくお降りになりました。

そしてその日はまたイエスが死人の中からよみがえられた日から 50 日目の日でもありました。

イエスの弟子たちに聖霊が特別に注がれることは、イエスが地上におられたときに前もって弟子たちに約束して下さっていたことでした。

十字架につけられる直前に。

「わたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにして下さいます。この方は真理の御霊です。」

(ヨハネ 14:16,17a)

「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち、父から出る真理の御霊が来るとき、その方がわたしについて証ししてください。」(ヨハネ 15:26)

また昇天なさる直前に。

「使徒たちと一緒にいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。『エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けましたが、あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを授けられるからです。』」(使徒 1:4,5)

使徒ペテロは聖霊降臨の出来事に驚いて集まって来た人々に証ししました。

「ですから、神の右に上げられたイエスが、約束された聖霊を御父から受けて、今あなたがたが目にし、耳にしている聖霊を注いでくださったのです。」(使徒 2:33) と。

聖霊は「父なる神」「御子なる神(イエス・キリスト)」と並んで永遠に「三位一体」の神であります。

(ペテロの言葉にあったように、) 聖霊は、天の父なる神とその右におられる御子イエス・キリストから出て、御父と御子が地上にいる私たちに与えてくださる(神なる)「お方」です。

今日の聖書箇所、ヤコブの手紙で「**神は、私たちのうちに住ませた御霊を、ねたむほどに慕っておられる。**」とヤコブは言っています(4:5)。

[因みに、このヤコブは先週にも見た「ゼベダイの息子」ヤコブではなく、「この人は大工の息子ではないか。母はマリアといい、弟たちはヤコブ…」(マタイ 13:55)と人々が言っていたヤコブ、「主の兄弟ヤコブ」(ガラテヤ 1:19)だと考えられています。]

そして、このみことばは「**神が私たちのうちに住ませた御霊は、ねたむほどに(私たちを)慕い求めておられる**」とも訳されるということです(欄外注「別訳」)。

[また更に因みに、採用された訳にしる別訳にしる、この言葉を「**聖書は…語っている**」とヤコブは言っていますが、この引用に直接あてはまる特定の言葉は「**聖書**」(当時で言う「**聖書**」とは今で言う旧約聖書のことです)にはありません。これはヤコブが(旧約)「**聖書**」の教えとそれまで見聞きしたイエスの御業やみことばを総合し“神学して”導き出した言葉ということになります。]

さて、どちらの訳を採るにしても、「**御霊**」(聖霊)は「**神**」が「**私たちのうちに住ませた**」ということがまず大事であり、驚きです。

私たちは何と言っても生まれながらの罪人です。

私たちはその「心が思い図ることは、幼いときから悪である」(創世記 8:21)者です。

そして私たちは「自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、かつては、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。…みな、不従順の子らの中にあつて、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」(エペソ 2:1-3)

私たちが「異教徒であったときには、誘われるまま、ものを言えない偶像のところへ引かれて行」(I コリント 12:2)くほかありませんでした

そんな私たちが神に救いを求め、イエス・キリストを信じて主と告白できたのは、ただひとえに私たちのうちに神が与えてくださった聖霊の恵み、力によるのです。

「聖霊によるのでなければ、だれも『イエスは主です』と言うことはできません。」(I

コリント 12:3)

そうやって「あわれみ豊かな神は、私たちが愛してくださったその大きな愛のゆえに、背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。」私たちが「救われたのは恵みによるのです。」(エペソ 2:4,5)

「神はまた、私たちに証印を押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました。」(Ⅱコリント 1:22)

私たちのからだも私たちの「うちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり」、私たちは「もはや自分自身のものではありません。」(Ⅰコリント 6:19)

このようにして私たちの汚れた心もからだもキリストのものにしてください、そうやって私たちが救ってください、殊に救いの確証を私たちに与えてくださるのは神が「証印」「保証」として私たちに与えてくださった聖霊であられるのです。

「神」が「私たちのうちに住ませた」、「御霊ご自身が、私たちの霊とともに、私たちが神の子どもであることを証ししてくださいます。」(ローマ 8:16)

「その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいる」(ヨハネ 14:16)とイエスが弟子たちに言われたように、聖霊が「私たちのうちに住まわ」れるのは一時的とか気まぐれなものではなく、常に、そして「いつまでも」つまり永遠のことなのです。

こうして驚くべき神のあわれみ、恵み、イエス・キリストのゆえに、罪人である「私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれている」(ローマローマ 5:5)のです。

ということは、聖霊も当然私たちが愛していただいています。

聖霊は単なる“力、パワー”ではありません。

「そのひとり子をお与えになったほどに」(ヨハネ 3:16)私たちが愛しておられる父なる神、また何度も何度も私たち愛していると言われ、十字架で私たちのためにいのちを捨ててくださった御子なる神イエス・キリストと全く完全に同じように私たちが愛して下さっている神、三位一体の神の第三位格の神、人格(むしろ神格というべきか)ある聖霊なる神なのです。

そして私たちが愛して下さっている聖霊の愛の深さ広さ大きさを、それは「ねたむほど」(4:5)だとヤコブは言うのです。

「神が私たちのうちに住ませた御霊は、ねたむほどに(私たちを)慕い求めておられる」(別訳)によればまさしくそうです。

「慕い求めておられる」は「愛しておられる」(口語訳、新共同訳)ということです。

聖霊の「ねたみ」は、もちろん私たち罪人が普通に人をねたむのとは違う「ねたみ」です。

それはご自分に所属する者を当然愛し、「慕い求め」る激しい神の御心と言うべき御思いなのです。

それはもはや「立派だから」「偉いから」「強いから」「ちゃんとしてるから」「よくやっているから」というものではありません。

むしろ全然そうではない、どうしようもない、箸にも棒にもかからない私たちのうちに、御父と御子から出てご自分のものとして住んでくださっているがゆえに「ねたむほどに(私たちを)慕い求めておられる」のです。

聖霊でなく神のみこころでなく自分のうちの「欲望」を愛し「慕い求めて」いる私たちが黙って見ていることがおできにならないのです。

聖なる神の霊であるわたしには関係ない、汚れたものには触れたくないみたいなことは仰らない、仰ることができないのです。

むしろこうはっきりと言われるのです。

「あなたがたの間の戦いや争いは、どこから出て来るのでしょうか。ここから、すなわち、あなたがたのからだの中で戦う欲望から出て来るのではありませんか。あなたがたは、欲しても自分のものにならないと、人殺しをします。熱望しても手に入れることができないと、争ったり戦ったりします。自分のものにならないのは、あなたがたが求めないからです。求めても得られないのは、自分の快樂のために使おうと、悪い動機で求めるからです。節操のない者たち。世を愛することは神に敵対することだと分からないのですか。世の友になりたいと思う者はだれでも、自分を神の敵としているのです。」(4:1-4)

このように私たちの罪を明らかに示し、戒め、私たちを神の前にへりくだらせ、悔い亜改めさせ、イエス・キリストにある罪の赦しを求めさせる、またすでにイエス・キリストにあって罪赦されていること、神の子とされていることをも「思い起こさせる」のが聖霊の働きです。

そうやって私たちのうちに住ませた聖霊によって「神は、さらに豊かな恵みを与えてくださる」のです。

「さらに豊かな恵み」とはますますイエス・キリストご自身であり、イエス・キリストにある罪の赦しであります。

今この地上にいる「私たちのうちに住」んでおられる聖霊ご自身が何と言っても天の御父と御子なる「神に従い、悪魔に対抗し」ておられるのです。

私たちのうちには元々この「神に従い、悪魔に対抗」する力は全く完全にありません。

またもし「神に従い、悪魔に対抗」することを始めたとしても（当然、すぐにまたいつでも始めなければなりません）、すぐに自分自身疲れたり嫌になり、楽な方へ楽な方へと傾いて行ってしまいます。

それに加えて世の中の他人の目が気になり、ちょっと反対されたり迫害のようなものが加われば（いや、そんな予想・予感がただけでも）もうたまらず、忍耐することなく、たちまち白旗を揚げてしまいます。

しかし「私たちのうちに住」んでおられる聖霊は違います。

聖霊は限りなく深く「ねたむほど」執念深く私たちを「慕って」愛してくださっているのと同じほど限りなく深い執念と忍耐をもって疲れることなく「神に従い、悪魔に対抗」し、日々私たちの罪と闘っておられます。

私たちがその聖霊のお働きを全く信じて、委ねて、それゆえ「神に従い、悪魔に対抗」する闘いをするように、一步踏み出すように、また踏み出したなら忍耐をもって続けるように、その力を真剣に神に祈り求めるように、神のみことばと聖霊の助けを必死に祈り求めるように、聖霊は私たちに「ねたむほどに」激しく、「切に望み、切に求めて」（「慕う」とはそういう意味でもあります）おられるのです。

そうやって聖霊は弱い私たちを必ず助け、強め、励まし、永遠の救いの完成へと導いてくださるのです。